2012～15年、3カ年事業の中での変化と見えてきた「芽」

2016～ | 2015 | 2014 | 2013

3年目 | 2年目 | 1年目

10代の若者中心の新規事業

DICプログラム改善

子ども虐待対応

HIV、ファーストエイド

コミュニケーション

← フォローアップ ～

コミュニティ・ケア

保護者会の実施

学校訪問

↑JVCによる研修

人種差別反対キャンペーン

子どもの家庭訪問定期的実施

←各DIC独自の取り組み

子どもたちがDICの変化に反応し始める

子どもたちがDICに来ることの意味を見出し、積極的な参加や子ども同士のサポートの様子が見られるように。

日々のプログラムを子どもたちの興味を引く内容に工夫

HIVケア事例の増加

子どもケアセンター(DIC)の場の重要性を認識するようになり、ゲームを通して学びを得るなど、日常的な活動への工夫が取り入れられ始める。また、地域と子どもたちからの信頼を得て、HIV陽性の子どものケアの相談などを持ちかけられるようになる。

「子ども」を中心に考えたアプローチへ

他者との協力を強化

地域の人びとともに子どもを支えることの重要性に気づき、関係構築を始める。ソーシャルワーカーや村長、子どもたちの保護者と対話をし、協力を仰ぐようになる。
同時に子どもたちの虐待ケースなど解決件数が増える。

啓発活動を活発に開始。学校での特別授業を積極的におこなうように。

自らの役割を認識。

研修を通し、子どもたちに対してボランティアとして果たすべき役割を認識、子どもたちの家庭環境を知ることの重要性を認識し、自ら継続的な家庭訪問を開始する。

スキルを身につけ、知らなかったことに気づく

「学ぶ」ことで、自分たちが知らなかったこと、活動に必要なことが見えてきた。しかし、学んだ知識の使い方がわからない状態。